

資 料

スーザン・ローランド著
ユング：フェミニスト改訂版(3)^{訳注1)}

第3章、3章注、訳注

翻訳 中村このゆ*

Chapter Three, Its notes and Translator's note
of *Jung A Feminist Revision* (3)
by Susan Rowland

Translation by Konoyu NAKAMURA

第3章 女神と女性原理

私たちは、神話がただ楽しいだけのお話でなく、忘れ去られた時代の神々や英雄、あるいは悪魔に関するたわいなお話でもないということを感じく。神話は生きた心理学的素材について語り、そして個人の内的生活に対しては、まさに真理の宝庫としての役割を果たしている。このことは、単に個人に対してのみならず、共同体の生活に対しても同じである。

(Nancy Qualls-Cornett, 聖娼－永遠なる女性の姿, 1988)^{訳注2)}

この第3章では「ユングアンフェミニズム」として知られているものを紹介する。「ユングアンフェミニズム」を「伝統的ユングアンフェミニズム」と後の章で言及するより多彩で異なった可能性をもつ「ユングアンフェミニズム」に分けて考えるつもりだ。伝統的ユングアンフェミニズムは、ユングのグランドセオリーを堅持する。これは、伝統的ユングアンフェミニズムがユング自身のところと文化に対する一貫した理論への試みからジェンダーと女性的なるもの堅固な概念を得ようとすることを意味する。ユングアンフェミニズムの主要な著者の業績をこのような文脈で検討する。

ユングアンフェミニズムは、ユング派の技法の拡大、改訂、そしてユングの拡充法の見解を通して、ユングの著作の外側へ向かう。これらの著者は、新たな社会状況の多様さに応えるために、

*追手門学院大学心理学部

アニムスとアニマ理論を拡大し、改訂する。拡充法のもとで、ユングの問題あるエロスと「女性的なるもの」結びつきは大きくなる。ある理論家のグループによる一つの対応は、「女性的なるもの」を両性に有効な形而上学的なもの、また西洋文明の中で悲惨にも抑圧されてきたものとして定義する。

(元型の中の)ヌミノーン的なものの中で、ユングの女性性への注目すべき拡大は、男性支配的な一神教文化の拒否であり、グレートマザーの聖性への「回帰」を支持するものである。「グレートマザー」が自然な世界に聖なるものを吹き込み、作り出す。「グレートマザー」は世界の中に、また世界のどこにでも存在する聖性であり、世界と切り離されずに、世界を超越する。そこで、ユングギアンフェミニズムは歴史、文化、宗教、美学そしてこころの最も野心的フェミニズの神話となる。

本章は、ユングギアンフェミニズム（グランドセオリー）が何を達成したかの評価をもって終わる。そこでは、心理学的フェミニズムにとって、神学の領域を超えた女神フェミニズムの魅力を示す。そのあと、その代わりとして、よりポストモダン的な、「女神」への注目を構成する方法を提案する。それは客観的理論というより、むしろ「ユングギアン女神フェミニズム」を想像の中のある種の新たな試みとして考える可能性である。女神フェミニズムは、ポストモダン時代の自己のための創作を提供するかもしれないのだ。

グランドセオリーとユングギアンフェミニズムの紹介

先の章で、ユング心理学には二重の欲求が込められていると定義した。一つは、「グランドセオリー」と名付けた、こころと文化を全て包括する権威的な説明を行う傾向である。もう一つは、「個人的神話」と呼ばれるものである。それは、純粋に合理的な用語では知りえない無意識の不可知性に反して、そのような主張を制限しようとする欲求である。「個人的神話」という見解は、ユングの基本的考えの発生をユング自身の伝記的説明に求める。

ユング以降のジェンダーと女性性に関する業績は、ユングの思考のこの二つの方向に関連すると非常にわかりやすい。これは以下の理由による。まず最初に、心理治療技法としてのユング心理学ではなく、ユングの理論形成の企図から派生したものを漠然とユングギアンフェミニズム（ユングのジェンダーの扱いの中の特別で、批判的な興味を示すもの）と名付けたことによるかもしれない。加えて、ユングの理論化の活動の二重の意味をくみ取る中で、ユングギアンフェミニズムはフェミニズムのより広範な関心を同時に噛み合わせる。このような論争の幅は、生得的な「女性的本質」の上に立つ伝統的立場からジェンダーをその背景と特別な文化設定の中でしのぎを削っているものと考えられる立場にまで及ぶ。

本章では、ユング以降のジェンダーと女性性をこころと文化のグランドセオリーへのユングの欲求という見地にたつ。そこでは、研究者たちはジェンダーの有効で権威ある理論のための素材を提供するユングに期待しているのだ。したがって、このような一つの理論は、女性と女性

的なものに貢献するために使われる。しかし、このような研究者の多様なフェミニズムは政治的スペクトラムなものとなるかもしれない。ユング派のグランドセオリーを継承すると、ジェンダーは分かりやすく堅固なカテゴリーであるという信念になる。しかし、偏向した創設者、ユングから遠くにあるユングアンにとって、ジェンダーは社会的影響を受けやすいものである。

ジェンダーと女性性に関するより一貫したユングの著作の外側で考えるためには、三つの方法が用いられる：拡大、改訂そして拡充である。ユング心理学の早期から特に女性研究者は、アニムスのような女性に関する領域でのユングの還元的意見についての論議を採り上げることに熱心であった（後の節で触れるリンダ・フィールツ-ディヴィッドをみよ）。このような研究者はユング自身のジェンダーの扱いを拡大し、改訂する。

拡充法については、もう少し説明が必要であろう。というのも拡充法はユングが自分の著述どのような分析の中で発展させた技法だからだ。夢について論じる時、「拡充法」は心的イメージや物語から神話へ飛躍することを意味する。それは同じ元型の出来事を説明しているように思われる。ユングはグランドセオリーと同時代の神話学を用いた。『思い出、夢、思想』の中で示されるユング自身の心的イメージの数々がユングの個人的神話を形成する。ユング自身の元型的形姿を現存する神話に結びつけることで、ユングが一つの心理学を普遍的主張として構成することができるようになった。このように拡充法は心理治療の実践と理論を組み立てる構成的道具の両方となる。

ユングの著作とこの章のユングアンフェミニズムの著作の両方によって、拡充法は理論を著述ための二つの方向性に移る。自伝と分析の中の、心的イメージが元型的なものに理論化され、そして一つの神話に結び付けられる。さらにこの神話は、理論的議論の更なる例証として記載されていった。この心理学が心的イメージから文化的神話に代る。ユングはこの方向を正当化する。というのもそれが実際の心的素材に根差しているからである。そこで神話は、正反対の方向に置き換えることの正当性を保証するものなる：たとえばバルセボネーとデーメテルといった一つの元型的素材を内包するものと定義される。そうして、イメージの数々とギリシア神話の物語に対応する出来事が、患者個人の夢の中で探し求められ、心理学の書物に記載される。

これこそ「女神フェミニズム」とでもよんでもよいユング派の前提である。それは、たいてい不安的な女性のところをエンパワーするような筋書きをつくる。女神フェミニズムの早期の古典的な一例は、M. エスター・ハーディングの『女性の神秘』である。¹⁾ この魅力的な著作は、女性のところをエロス、関係性の機能、そして錬金術の中の月の重要さとするユングの認識を拡充する。『女性の神秘』は月の女神の女性原理を活動的な権威とした素晴らしい労作である。このような女性性は、女性にとっては生得的なものともみなされる。しかし、男性心理学ではアニマのなかに存在するのである。

この著作によって活性化されたことは、女性にキリスト教的一神教の制限の全く外部に、哲学的「居場所 (home)」を受けることである。女性への援助にマイナスな面は、ハーディングが、

女性の意識に対するユングの還元的な見解に固執した点である。それは、女性の意識がより散漫で、社会の中で積極的な立場をとるより他者との関係を作ることにより向いているというものである。この例が示すのは、拡充法によって、いかにユングアンフェミニズムが根本的に哲学的または神学的立場に性格づけられたということであり、また女性の現実の生活に対してはその規定の中で、いかに保守的に性格づけられたかという事である。

この章の残りの部分では、ユング以降、ジェンダーと女性的なるものに関してグランドセオリーが示唆するものを、3つの側面から検討してゆく：アニムス、アニマ理論の拡大と改訂、エロスと女性原理の拡充、そして女神フェミニズムの生成である。各節でその領域の短い説明に続いて重要な研究者について考察する。

拡大と改訂：アニムスとアニマ

ユングは、アニムスについてほとんど記述しなかった上、その大半は否定的なものである。勿論、ユングがアニムスを女性の中の元型的な男性性として定義したので、アニムスは女性研究者が最も吟味する基礎となる。ユング以降、アニムスとアニマは重要な改定と推敲がなされ、両者は共に、肯定と否定の極を同等に持つものとして考えられてきた。これらのジェンダーに関する元型は積極的もしくは受動的に機能するとみなされ、個人的成熟と個性化の機能の中で、変化するものとして説明されてきた。複数の否定的なユングのアニムスに関する描写から、女性の実研究者達は、アニムスを単一で肯定的な存在となしう改訂版を作り出してきた。

異なったアプローチをとることで、アニムスの描写の中にあるユングの敵意を追及するフェミニストもいる。そして否定的アニムスは女性が内面化している父権性の取り入れであると考えている。最近の研究は、アニムスとアニマ両方の元型的イメージの構築に文化的要因がより大きいという考察を含む。

また、ユングが、アニマ／アニムスを異なるジェンダーの中に形姿として持ち込むこみ、身体的性とジェンダーを絶対的に同一視するので、ユングアンフェミニストは更なる段階に進んだ。フェミニストは、アニマとアニムスが両性に平等に有効であると考えていることで、アニマとアニムスを一つのジェンダーからの切り離しを提案する。したがって、男性と女性はロゴスを有するアニムスとエロスを有するアニマの元型的形姿に平等に関わることができるのだ。

主要な研究者

エンマ・ユング 興味深いことにこのユングの妻²⁾は、ユングの一般的原理に忠実な一方、自分たちの文化にある女性の劣等性の信念に対抗するよう女性に促した。女性は、力を落とさず、社会の中傷を跳ね返すために「自らを高め」なければならない。³⁾ 夫のユングと対照的に、エンマ・ユングのアニムスに関する考えは、非常に肯定的であり、アニムスの統合が「積極的、精力的、勇敢で行動力ある女性」へとつながる。⁴⁾ 訳注3)

アニムスをロゴス、霊的意味と知性であるという定義を継承しながら、アニムスは、一連の

ステージを通じて進歩的に統合される。すなわち、力、行為、言葉そして意味である。そのような方法で、女性は自分のロゴスの能力を吸い上げ、情緒的活動と関わるエロス同様に知性的になることができるかもしれないのだ。エンマ・ユングにとって、もし女性が自分自身の権威としてのセルフに気づけば、そのアニムスをしっかりと管理しなければならないという事は、自明のことであった。そうでなければ、アニムスによって象徴される男性性原理は、内なる暴君となるかもしれない。またそれが、権力を持つ男性に投影されると、心理的依存という耐え難い状態におわることになる（非常に示唆深い考えである！）。

女性の有するロゴスというユング派のアニムス概念にどつぷりと留まりながら、エンマ・ユングは、女性が情緒的で知性的の独立を達成するという肯定的構図を描いた。同時に、エンマ・ユングは、女性の内的発達促進を拒否する社会の中の女性の様々な問題に注意を向けた。

リンダ・フィールツ-ディヴィッド フィールツ-ディヴィッドは女性の個性化に関して二度にわたって述べている。最初は、神話の点から、後年にはアニムスの批判的改訂である。最初の段階では、フィールツ-ディヴィッドはアニムスを内面化された父権性と定義するように思える。女性が、自分の父親や権威ある人物を通して霊的指示（アニムスの贈り物）を得ると述べているからである。次に、アニムスとアニマがジェンダーに固定しているというユングの傾向を捉え直している。これに対して、彼女は、アニムスとアニマを複数で両性具有的な無意識のプロセスと捉えた。フィールツ-ディヴィッドにとって、アニムスの霊的可能性の一部は母性的な役を担うものである：「アニムスの元型的イメージは、決して現実には存在しないような、魂（soul）の導き手、オルペウス教^{訳注4）}」のサテュロス^{訳注5）}、母親-父親そして知恵ある教師のようなものである。」⁵⁾

イレーネ・クレアumont・デ・カスティヨ イレーネ・クレアumont・デ・カスティヨはユングのアニムスの否定的側面を拡大した。しかし、特に焦点をあてたのは、アニムスが女性の拡散した意識を精力的に活気づかせる構成品として統合されう点を強調したことである。イレーネ・クレアumont・デ・カスティヨは、思考をアニムスと同等視しなければ、普通の女性を導くものとして機能しないと論じる。これは決定的なユングの改訂である。

社会文化的要素の色眼鏡で見られた否定的なアニムスの顕現について、クレアumont・デ・カスティヨは『女性を知ること』の中で、次のように示唆する。すなわち否定的アニムスの表現は女性への男性の攻撃が内面化されたものである。⁶⁾ クレアumont・デ・カスティヨはユングの著作中の女性の中のアニムス、男性の中のアニマというジェンダー二元論と決別し始める。すなわち、女性の「魂のイメージ」が女性的であって、男性的アニムスではないと主張することで。しかしながら、クレアumont・デ・カスティヨはアニマという用語においてはより保守的である。なぜなら男性のアニマを具現化することによって男性の個性化を可能にする女性と見なすからである。

ヒルデ・ビンズワンガー ヒルデ・ビンズワンガーのジェンダーへの態度は、生物学的なもの
と文化的なものの組み合わせたものである。1963年の論文では、女性の男性性を二つの側面に分
ける：アニムスは女性の内的男性イメージから成り立つ。しかし、また生物学的意味で女性は
女性自身の男性性を有する。⁷⁾ この二番目の男性性をユングではエロスに繋がる。ビンズワ
ンガーは（ユングが好んだように意識としてのロゴスではなく）理解と意識に拡大する。アニム
スの否定的言説は文化的なもののように見える。心理治療の目標は、女性自身の男性的側面を
活力、行為、言語そして意味という女性的形に向かって働くやり方のアニムスに一致させるこ
とになる。ビンズワンガーは、これらの性質が単に男性的と呼ばれるのは、それらの質に男
性が最初に命名したからだ、と説得力を持って主張した。「女性も自分の心を発達に当たって、
特に男性的と女性的活力、男性的と女性的言語、男性的と女性的行為、男性的と女性的意味の
発達とはなり得ないのではなかろう？」⁸⁾ ビンズワンガーは両性間の違いを残すようにうまく
扱いながら、女性性のために平等な作用と知的な可能性を理論化した。ここに、社会の中で
男性性をもつ力と特権を心理学的に取り扱うことで、アニムスが女性の個性化の意味となった
のである。

アン・ウラノフ ユングと女性性に関する精力的な研究者の一人であるアン・ウラノフは、一
連の業績を残した。非常に影響力がある『ユング心理学とキリスト教神学における女性性』
(1971)⁹⁾ から、もっとも最近のベリー・ウラノフとの共著『セクシュアリティの変容：アニマ
とアニムスの元型的世界』(1994)¹⁰⁾ があげられる。ウラノフはいつも、アニマは現実の女性
と文字通りの同じものではないと主張する。

ユング派のアニマとアニムスの役割概念に忠実なアン・ウラノフは1971年の著書の補追を書
くまで、ユングの女性蔑視の言説に触れることはなかった。1994年の著書では、ウラノフは
「ユング自身の紋切り型還元の見解」を批判し、こう述べている：「アニマ／アニムス理論を明
確にし、『男性性』と『女性性』の本質のはっきりした表を作ることはほとんど不可能である。
ましてや、長きにわたり神聖視された『ロゴス』の技術は男性に、『エロス』を女性にという
ユング派慣例の区別の分類など不可能である。」¹¹⁾ ユングのアニムスとアニマ概念の拡大は改
訂され、アン・ウラノフの初期の著作で単純に両極的に想定されたものより、ジェンダーの差
異はより複雑な概念となったのである。

マリオン・ウッドマン マリオン・ウッドマンの業績は、身体とジェンダーの元型的顕現という
点においてひととき目立つものである。そのひとつは、摂食障害の女性の分析である。アニム
スとアニマ理論においては、ウッドマンは伝統的立場に立つ。それを延長し、アニムスの問題
が種々の摂食障害を引き起こすかもしれないと主張する。ウッドマンは『完璧主義嗜癖：未だ
清らかな花嫁』(1982)¹²⁾ とか『女性性の再発見－肥満とやせ症を通して』(1980)¹³⁾ のよう
な著述で、父親の娘へのアニマ投影が女性を傷つける結果について詳しく述べる。女性の摂食

障害はアニムス憑依によっておこるのかもしれないという。女性は自分の身体の感覚に焦点づけられた不可能な完璧主義に駆り立てられる。

ポリー・ヤング-アイゼンドラス ポリー・ヤング-アイゼンドラスは、フェミニズムと女性をエンパワーする臨床実践のために、アニムスとアニマに関するユングの叙述を一貫して改訂し、拡大した。アイゼンドラスは文化的神話と物語を性差別への攻撃のために修正的に用いた。その著作は想像力に富み、影響力がある。

フローレンス・ヴィーデマンとの共著『女性の権威：心理療法によって女性をエンパワーする』（1987）によって、「包括的なユングの女性心理学」を提唱する。「その中で、女性の自己は、アニムスコンプレックスと女性がアニムスに投影している権威の再生を通して意識と力に到達する。」¹⁴⁾ この著作は、古典的ユング派のアニムス理論を女性のエンパワーメントのために再解釈するといった大きな改定ではない。このやり方は、アニムスの心理治療的統合段階として刷新したのに似ている。

ヤング-アイゼンドラスとヴィーデマンは、女性のアニムスとの関わりによって図式的なビジョンを提案する。それは、まず見知らぬ他者、そして父-神もしくは家長である。これらの段階に次いで、若者、英雄もしくは恋人としてのアニムスが続き、最後は内なるパートナーとなる。女性は、アニムスの元型的「真実」と両性性の中に表された、統合されたアニムスの段階に止まらねばならない。ヤング-アイゼンドラス単独の初期の著作、『夫婦カウンセリング-女が真に求めるものは何か』では、ユングが女性を本来受動的に描写したことを強く批判する。ヤング-アイゼンドラスは、「アニムスに乗っ取られた」状態という概念でユングがどれほど女性の有能な感覚を損なうかについて詳述している。¹⁵⁾

クレア・ダグラス ユング心理学とジェンダー全体の領域で、計り知れない意義を持つ著書は、クレア・ダグラスの歴史的分析『鏡の中の女性：分析心理学と女性性』（1990）である。¹⁶⁾ ダグラスの見解は、改めてアニムスをロゴスと知性ではないと明確にする。アニムスは、女性にとって父なる大地、自然、霊、庭師、養育者や詩人のイメージとして感情機能の媒介者となる。「アニムス」と「アニマ」という用語はユングのテキストからそのままの形で用いるべきではなく、それらの説明に込められた二十世紀初頭の性役割が基準とならないようにするべきだとダグラスは主張する。

ダグラスはユング派の伝統を強く主張する女性研究者である。否定的アニムスは、女性のことを損なうように内面化する父権的表現であると性格づける。「グランドセオリー」の中にとどまっており、アニマとアニムス概念は、内なる「他者」という理論を保持している。それだけではなく、ダグラスは、社会、文化的要因を、拡大、改訂して、ユング心理学の中のジェンダーの中に含めるという有益な傾向を強める。

拡充法：エロスと女性原理

女性性の伝統的ユングアンフェミニズムは、ユングのジェンダーに関する著作中の定義による二つの特徴に言及する：心理学的ジェンダーを身体的性に滑り込ませることと（元型の両性性にも拘わらず）、さらに意義深いのは、ユングの二元論的アプローチである。ジェンダーについてのユングの著述は、過剰なまでに、二つに分けて定義し、相互に排除的なやり方になっている：アニマは女性、感情、エロス、関係性、女性性におしめられる。一方、アニムスは、思考、ロゴス、霊性、創造すなわち男性性を強調する。

この章の前の節で、アニムス/アニマ理論の拡大と改訂がどのように心理学的ジェンダー二元論を失い始めたかを述べた。また、少なからず社会的、文化的要因を取り入れ始めたことも述べた。しかしながら、ユングアンフェミニズムの主流の方向は、現実の女性と男性の生活に文化的影響があることを認める一方、ジェンダーへの二元論的アプローチを力説する。

これらの理論は、ユングがエロス-関係性をいわゆる「女性原理」といういくぶん形而上学的なものとして著述しているのと同時に身体的性と切り離していることを示唆している。「女性原理」は「男性原理」と二元論的關係として存在する。この二つは、人間の両性に不均衡に多様に働く。種々の歴史と宗教の人間文化の背景に、これら二つの形而上学的ジェンダー原理が、能動的、太陽的、男根的男性性と受動的、受容的、月の女性性として横たわっている。

しかし、もしも男性性と女性性が男性と女性の程度を変えるものとして共有される単なる特性を意味するのであれば男性性と女性性について、何故わざわざでも議論するのだろうか？ 男性-女性の差異は、先験的にきちんと根付いているという事を改めて強調しなければならない：それは、あらかじめ決められた一つの認識であり、無意識のこころの中に元型的にパターン化されている。男性と女性の反対性と相補性は、もっとも基本的な二元論的経験の表現に属する。それらは、太陽と月、光と闇、能動的と受動的、靈魂と物質、エネルギーと実体、主導性と受容性、天と地などの二極性を強調する。¹⁷⁾

ユングはエロスを感情と関係性に関わる機能の元型的様式として自己の著作の中で紹介した。ユングはエロスが女性の支配的様式であろうと信じていた。同様にエロスは男性の中では眠っており、無意識的アニマと繋がっていると信じていた。したがって、エロスは心理学的に女性性となり、ユングによれば、女性原理は性とジェンダーが合わさったものを意味する。そして、ユングの錬金術のテキストの中では、エロスが月の意識として拡充されたのである。

後年、ユングアンフェミニスト達は、ユングの性とジェンダーを同一視するという還元的安全性をしりぞけている。彼らは、女性原理と男性原理は純粹に元型的であり、女性、男性の双方に有効であると主張するのである。このことを「形而上学」としてのユングの著作からの拡充と説明されるかもしれない。というのも、女性原理と男性原理を無意識の中の非-物質的前原型として捉えているからである。これらの「原理」は、社会、文化的要因に深い影響を受けるが、決定されるわけではない。なぜなら、これらの原理は、元型的イメージをとおして機能するからである。

女性原理と男性原理は、文化を超越し、(元型的イメージを通して) その中に内在するものとしてのみ現れる。

これらのフェミニズムとしてのユング派の理論が強調するのは、女性原理が文化と個人のころの中で、父権的思考によって、何世紀にもわたって壊滅的に抑圧されてきたという認識である。そのため、この理論の研究者は、社会文化的レベルと個人の心理治療レベルの両方で、傷ついた世界そのもの、怒れる女性を癒すことについて述べる。勿論、この女性原理に固執するユング派の中でも、広範で多様なフェミニズム的意識がある。社会に対する伝統的態度は、女性原理の受容性と関係性のため女性は家庭的責務により似つかわしいことを意味し、その主張のなかに正当性を見出す。

性とジェンダーが元型的原理によると理論的には述べるにもかかわらず、多くの研究者が女性により女性原理に向いており、男性は男性原理に向いていると考えているようだ。一方で、女性原理に二極的アプローチを持ち込むことで、男性-支配と共同する社会的レベルの資本主義の存在への深い批判をもたらしている。これによって、キリスト教の限界への攻勢を容認する。キリスト教は、過剰に男性的で、女性的と定義づけられた自然から略奪しているのだ。女性原理の「女神フェミニズム」へのさらなる拡充が、次節での主題となる。

主要な研究者

M. エスター・ハーディング 『女性の神秘-月の神話と女性原理』(1935) は、ユング派のジェンダーに関する論考のみではないが、ハーディングのもっとも影響ある著作である。エロス／ロゴスというユングのジェンダーの二分法を引き継ぐことで、この著作はユングの考えも受けいれている。エロスを「女性原理」に拡充することで、自分の師が期待するより、はるかに優れた力強い質の幅で論じることが可能になった。

重要なのは、ハーディングが、キリスト教の前の時期の月の女神の物語を取り入れたことである。これによって、女性原理の中に幅広い力が与えられたのである：ハーディングは、月の女神を「西欧の文化内で適切に認識、価値をおかれなかった『女性原理』」¹⁸⁾ を説明するものみなす。この著書の独創性は、女性原理の効力と暗黒という両側面の両価性を発展させた点にある。

ハーディングは、一見女性が関係性と家庭により似合っているという点でまだユングに従っている。しかし、一方で父権性社会の女性への偏見に対して、女性の可能性を雄弁に語っている。女性原理を分析の実践に持ち込んだ。それは、女性の異教徒的過去の月の神秘へのイニシエーションを現代世界の女性の体験の分析へと結びつける。

ハーディングの月の女神の女性原理という考え方は、ユンギアンフェミニスト世代を鼓舞し続けた。というのも彼女らの多くは、男性に頼らない、一人ぼっちの処女と感じていたからである。このような「ユング派処女」がセクシュアルで生殖的になれたのである。しかし、彼女

たちの自己満足の独立は、ヌミノース的無意識との関わりで生じるという点では変わらないままである。

トニー・ウルフ ジェンダーに関するトニー・ウルフの最も重要な論文は、「女性の個性化の過程に関する諸考察」(1934)¹⁹⁾である。この中で、ウルフは有用な提唱をしている。エロスが必ずしもすべての女性にとって、意識的機能のやり方に結びつくわけではないというものだ。ウルフによれば、現代女性の種々の問題は、ユダヤ教とプロテスタント神学の女性原理の欠落と女性原理の喪失に根差している。

その後、ウルフは、四つの女性の本能的パーソナリティーの検討に進む：母親、ヘタイラと呼ばれる男性のお相手、独立したアマゾン、そして霊媒である。実際、ウルフは、ユングの「タイプ」論の概念を使い、女性心理学の「女性原理」を表す範囲に広げたのである。ウルフのそれぞれのタイプは女性の行動の一律なパターンではなく、多くの可能性を含む多様なものである。

この四つのタイプは独創的な枠組みである：たとえば、母親は生物学的に子どもを産むことに限らず、養育と母性の多彩なメタファーを含んでいる。ヘタイラは原則的に男性との性的関係を通して機能する。それに対してアマゾンは、驚くにはあたらないが、フェミニストに同一視される。

霊媒タイプの説明は、ウルフの傾向をよく表す。それは、男性との関係で優勢となる女性性と女性の潜在可能性を定義している。この霊媒は、自分の無意識的直観に気づいた男性を助ける女性である。後に、ユングアンたちは、ウルフ自身のユングとの関係が「霊媒的」女性という感覚を形づくるのに役だったのではないかと推測した。

エーリッヒ・ノイマン ユングの第二世代のユングアンは、エスター・ハーディングのように同じ素材を多用する。ノイマンは、壮大な権威溢れるスタイルで著述する。文化の歴史家であるノイマンは『意識の起源史』(1954)²⁰⁾において、人間の意識発展の中の壮大な物語の段階を提唱している。人間性は無意識的未分化に近いウロボロティックな段階から始まる。それから、グレートマザーの様々な宗教の中に母権性が発生する。

これらの段階は父権的一神教と洗練されたロゴス志向の意識的思考と認識へと継承される(幸いにもノイマンはそう考える)。母権的女神の意識は父権的男性原理に再結合されることでより高い段階の可能性が示される。しかし、ノイマンはこの見解をそれ以上検討しないままにする。この見解は、特にE.C.ウイットモントによって、ユングの偉大な女神に関する業績を継承する形で、とりあげられる。これについては、この章の後半で検討する。

普通感覚では、誰もノイマンがフェミニストだということはできないだろう。ノイマンの女性原理は人類の歴史の母権性段階に属する。だが、ノイマンにとってユング同様、女性心理学の大半は女性原理の二元論的概念の問題である。女性の精神活動は「より無意識的」タイプ

に運命づけられている。そこで、ノイマンの女性性と母権性の混同が、女性を前史時代に押し込め、男性には、思考と論理という文化的に価値ある本質で優位性を与えてしまう。

ノイマンは、母親というものに元型的にも生物学的にも特別な恐れを有しているような著述を行う。ノイマンの意識発展の物語は、エディプス神話の形式である。まず未分化な無意識から始まり、権威を持つ全ての母性的形姿と繋がり、抑圧し、分裂し、そして父性的機能との同一化に至る。このエディパルなパターンの特別な使い方が女性原理をさらに歴史化し、周辺化する。いずれユングアンたちは、ノイマンの進化的アレゴリーを取り上げ、女性性とフェミニズムにとってより生産的なものに再解釈するだろう。

ジューン・シンガー 『魂の境界』(1972)²¹⁾と『男女両性具有－性意識の新しい理論を求めて』(1976)²²⁾のような著作の中で、ジューン・シンガーはユングのジェンダーの二元論を受容し発展させている。その過程で、ジューン・シンガーは「女性運動」から学んだと自認している。女性原理と男性原理を生物学的女性と男性への単純な同一化から分離する。それによってシンガーは、『男女両性具有－性意識の新しい理論を求めて』の中で、「いくつかの点で女性とは根本的に異なる」という現在のフェミニズムには反対の信念を主張している。²³⁾

シンガーにとっては、ユング派の潜在的な元型的「両性具有」の見解は、全体性への心理学的目標を理論化することを意味している。シンガーは、この元型の文化的歴史をたどることで、現代の女性と男性は、この両性具有を望ましい文化モデルにできると提案する。このやり方で、個人はジェンダーの両極性という危険を避けることができる。種々の元型は、原始時代に「壊される」か、意識に引き裂かれる前の古代の聖なる両性具有の残されたものである。ジェンダーを二元論の構造の中で、単体としての理論化を超えてゆくことが望まれるのだ。しかしながら、シンガーの提唱する両性具有はジェンダーを二重性としたままである。

今日現れはじめた男女両性具有への運動は、近代西欧世界における「男性的」要素と「女性的」要素のあいだの緊張関係から生じた。この運動は、男と女が神の内部でいまだ分割されていなかった始原の時代の神話に見られる、古い時代の男女両性具有を発見しようと螺旋状に進んでゆく。²⁴⁾ 訳注6)

イレーネ・クレアモント・デ・カスティヨ イレーネ・クレアモント・デ・カスティヨは『女性を知ること』(1973)で、自分の初期の女性心理学の研究を最新化している。トニー・ウルフの女性性の伝統的ユング派概念の中の四つのパーソナリティーのタイプを拡大する。この解剖学的性とジェンダーの切り離しには価値がある。：エロスが女性性を強く示唆するが、女性は、その特性に必ずしも限定されない。同様に思考は女性にもとからある機能であり、アニムスの概念に還元する必要はない。ウルフの絶対的に固定化した四つのタイプは、それらの役割が一人の女性の中にある心理的可能性の幅であるという主張によって、打ち消される。

もっとも重要なことは、カスティヨの業績が、ウルフやノイマンのような研究者による女

性は拡散した自我に同一化するという事に挑んでいることである。実際、カステイヨは、女性が強く、焦点づけられた自我－女性にとって現実的可能性を－発達させることを擁護する。カステイヨによる個性化の過程の一部は、女性が自分の影を、文化的、心理学的問題として発見することである。女性は三つの形で影に支配されている：国民の一人、個人的ところ、そして「男性志向的」社会の中の「女性であること」である。個性化は、女性に自分の個人的権威を容認する。それは、社会が女性のジェンダーに押しつけ続けてきた影を意識の中に持ち込むことでなされる。カステイヨにとって、内なる女性性を発見することは、内なるヒロインと内なる英雄を並列することである。それは「無機質な文明化」²⁵⁾にこめられた分かりやすい言いぐさの中にある彼女の「内なる怒り」を見通す。

最後にカステイヨは、「女性原理」と女性性が単に自然、身体そして大地を示すのではないと主張することで、発展的ユングアンフェミニズムを擁護する。これらの「原理」の二元論的見解がどのようなものであり、女性は男性にとってただ「反対」もしくは「他者」であるべきではないのである。

アン・ウラノフ ウラノフは早期の著書『ユング心理学とキリスト教神学の中の女性性』(1971)において、ユングの女性性への見解を称賛する。すなわち女性性は「明瞭なカテゴリーであり、全ての男性、全ての女性、全ての文化において生得的な認識の仕方」²⁶⁾である。このようなユングへの傾倒によって、ウラノフはフェミニスト神学の著書を表すことができた。それは、キリスト教文化が女性性の軽視、時には悪魔化することへのユングの批判を受け継いだものである。この神学的見方によって、ウラノフは後の著作でユング派のジェンダーに関する考え方を強調する。

また、この最初の著作は女性心理学の四つのタイプに発展する。ウラノフは、注意深くユングのアニマへの還元から女性を分離する。しかし、「女性原理」への熱心な信奉者であるため、ウラノフの性とジェンダーの分離は、女性は女性原理により近い関係であるという意図によっていくぶん緩和される。分析は、女性原理の統合のためであるべきなのだ。

E.C.ウィットモント E.C.ウィットモントは人類の意識の三つの段階というノイマンの神話を追及する－ウロボリック（未分化で大半が無意識的）、母権的そして父権的－そして第四の段階として、母権的思考と父権的思考様式の和解である。もう一つのやり方を導入することで、ウィットモントは、女性原理を、長年女性原理を抑圧してきた父権的、過剰な合理的文化の中に吸収することを望むのだ。

勿論、ウィットモントは形而上学的原理のジェンダーを身体的性から切り離すことで、外部の神話をみるか、または父権的なキリスト教では周辺に位置する女性の物語を統合する。このような神話の一つが、聖杯の探求である。もろくて、男性志向的な社会は、心理的堅固さを成し遂げるために女性的象徴を求める。それは同時に霊的で社会的である。もう一つの女性原理

の神話のために高い可能性をもつ資源は、異教徒の女神を求めることでキリスト教と一神教の外部に見出される。ウィットモントの業績はユングアン女神フェミニズムの偉大な創始者である。

拡充法：女神を求めて

女神フェミニズムへの要請と神学的背景を理解するためには、ジェンダーを超えたユングアンフェミニズムとキリスト教神話の境界をはっきりさせねばならない。また、西洋のフェミニズム理論は、キリスト教以降の歴史的背景の中で、形成されてきたものである。それは、女性と男性の役割、その心、ジェンダーの在り方の仮説とセットになって、構成され、明確に表現される。いずれにせよ、研究者と活動家は、キリスト教の核となる仮説の改訂か、それらをまったく拒否して新たなモデルを求めるのか決定せねばならない。この問題は、宗教的信仰を持つか、靈性に真剣に取り組むフェミニストだけにかかわることではない。むしろ、現代の文化の中のキリスト教の仮説の枠組みが、人工妊娠中絶の権利のように差し迫った政治的問題にも影響する。

この問題の核心は、キリスト教（そして／もしくは他の一神教）が、完全に父権的なのかどうか？ もしくは、それが、資本主義文化との協働の中にただ現れているのかどうかということである。キリスト教はフェミニズムになりえるのか？ もしくは置きかられるべきなのか？ アン・ウラノフのようなユングアンフェミニストは、キリスト教がユング派の考えに沿って、生を肯定し、聖なる女性原理を組み込むために再構成できると信じる。女性原理は、もはや暗い、肉欲の他者というものに制限されないというわけだ。

男性的一神教が果たして作りかえられるのかという議論の特別な側面は、理性の啓蒙主義的形式と宗教的文化の間の関係であり、互いに反発するものとして表れるかという事である。一方啓蒙主義は理性、科学、経験主義とロゴスを推し進め、確立された宗教にとって全体的には反対物となり、宗教を衰退に導くものとなる。他方では、フェミニストは、キリスト教の中の女性性の抑圧は、女性性は非合理的なものであるという近代の啓蒙主義の筋書きの抑圧によって、継続すると主張する。

キリスト教の父権性と男性の聖性への信頼は、劣等な不合理から切り離すことで作りあげられ、男性的理性を特権として整える。理性から不合理の不要な質を切り離す一方通行は、理性／不合理という二元論をジェンダー構造として解釈する。すなわち、理性は男性的、不合理は女性的というわけだ。啓蒙主義以前には、男性性は神（God）と結びつけられた特権である。啓蒙主義以降は、男性性は理性と結びつけられた特権となる。啓蒙主義とポストモダン主義についてのユングは、第6章を見てほしい。

ユングのジェンダーに関する研究は、啓蒙主義を宗教から逸らせるように取り組む意図のもとに行われている。ユングはキリスト教規範の中の女性的形姿への回帰を追及する。また、ユングの錬金術に関する幅広い研究は、キリスト教的思考を改変しようとするものである。その方法は、

理性と不合理を提供する啓蒙主義、もしくはユングの用語でいうならば、ロゴスとエロスの癒しである。ユングの還元的な女性蔑視のいくらかは、つまるところユングがジェンダー用語で表現された啓蒙主義の両極的概念を採用することによる。そうとうはいえ、ユングにはフェミニストの資格がある。女性性と不合理（無意識）を宗教と哲学両方の中に、押し戻そうとしたからである。

ユングに続くユング派のあるフェミニストは、キリスト教もしくは一神教の構造を改変しようと試みる。そうでないフェミニストは、キリスト教を父権性に落とし込み、改変する基礎を持たないとみる。もしも、一神教が回復不能であれば、これらのフェミニストにとって必要なのは、諸々の女神である。女神が求められるのは次の理由による。もしもジェンダーが（伝統的ユングアンフェミニズムのその定義によって）性格堅固なカテゴリーであるのならば、基盤となるある種の「より高度」な物語が求められる。もしも、キリスト教があまりに過剰な父権制に飲み込まれているために拒否されるのであれば、もう一つの形而上学的枠組みが、仮定されなければならない。

ユングアン女神フェミニズムは、ユング派理論の拡充法から生じているが、ユング自身が思い描いたものを超えたものである。ユングは、自分の心理学を一神教的種々の見解を優先的な一つの元型、個性化の到達目標である、セルフに従属するものとして作り上げた。ユングアン女神フェミニストは、セルフ元型に置かれた単一エネルギーを拒否する。そして、ジェンダーの複数性も含む、セルフの複数性を取り上げる（偉大な女神については次節参照）。その代わりに、ユングアン女神フェミニストは、一つのセルフという見解を無視するかもしれない。そして、多くの可能性を持つ種々の元型の考えを引き上げることにより、女性的聖なる存在としての表現を可能にする。これは、一個人の個性化の中で重要な役割をはたす。

女神フェミニズムにおいては、形而上学的女性原理は、キリスト教以前の神話学に図示される。非父権的な物語と思考様式を求めるためである。このようなフェミニストは、神話の中の理論というユング派の方法論に留まるため、ユング派のままである：元型的と理論づけられた心的イメージは、伝統的神話学に同一化され、逆もまた同様である。

この教義に従うユングアンフェミニストは、文字通りの女神礼拝を支持していない。これら女神の聖なる存在は、人類の無意識のイメージのなかにある。超越的女神の実存は現実には「外のどこか」にあるとは考えられない。その代わりに、女神フェミニズムは、分析と個性化を神格の領域へのイニシエーションと定義する。ここでの「イニシエーション」は、単なるメタファーではない。古代の女神文化にイニシエートするものは、多様な指針と分析的個性化とみなされる。つまるところ、ユング派の理論では、第一の現実とは心的イメージであり、そもそも宗教的体験が真正の無意識に近いものなのだ。神話の神々の超越的領域に関するどのような考えも認識不能であり、証明不能なのである。

女神フェミニズムは、今日の資本主義的、物質的、非宗教的文化の中での流行ではない。加えて、フロイト派の精神分析から派生するフェミニズム理論にとっては受け入れがたいものである。

(第5章を参照)。それだけでなく、キリスト教以前の宗教的伝統から取り入れる物語を資源としてみる価値が十分にあるということかもしれない。女神の物語は、ジェンダーの現代的理解を促すことができるだろうか？ また、女性の心理学的可能性の物語として促すことができるだろうか？ このような女神の伝説が、今日の社会的、物質的状况にすべて関わるのだろうか？

ジネット・パリスの『堕胎の秘跡』(1992)は、非キリスト教の物語を使うことで、フェミニズムの可能性を証左する。それは、深い物議をかもし個人的、政治的そして社会的問題に関する考えを構築するためである。²⁷⁾ 現代の堕胎の議論がどのようにキリスト教の神話に依存しているかを示す。その後、パリスは堕胎を再びイメージするために、分娩中の妊婦によって呼び覚まされるアルテミス、処女神の伝説を用いる。この女神の伝説を通して、パリスは、堕胎を母親の犠牲として考える。母親は、自分の生殖を抑制しなければならないか、父権的態度のために母親自身を犠牲にしなければならない。「このような文脈で、古代の女神アルテミスを振り返ってみると、次のようなイメージに導かれる。男性、女性間の生と死に関する権力のあらたな分配である。男性にとっては、生命の代価を認識させ、女性には自分の母親の知恵にたつて、決定することができる。」²⁸⁾ パリスは、女神フェミニズムの価値がジェンダーへの関心と女性の生に関して「異なった思考をする」ための好機であることを示した。このフェミニズムは一義的には心理学的、治療的であるが、それでもより広範な政治的、文化的批評に貢献するかもしれない。

主要な研究者

シルビア・プリントン・ペレラ 治療的女神フェミニズムに影響を与える著書は、ペレラの『神話にみる女性のイニシエーション』(1981)²⁹⁾である。ペレラは、女神イシュタルの冥界下りのシュメール神話を次のように解釈する。すなわち、イナンナの影の姉妹であるエレシュキガルは、暗黒の抑うつ元的元型と女性が出会うことが心理学的、癒しの価値あるモデルだというのである。実際、この女神神話は、冥界への旅と帰還が、うつ精神状態の女性をエンパワーすることをペレラは明確にする。

女神神話は、暗く、抑圧された女性的痛みを劣った地獄としてみるのではなく、違った見方をする。ある文化の宗教的元型的イメージが不可能な光と処女マリアの至高、また罪に満ちたイブというイメージだけを提供しているなら、このような文化は、肯定的な女性的暗黒という特有な言葉で再考される。

クリスティーヌ・ダウニング 学術的心理学と宗教学として、クリスティーヌ・ダウニングが、1984年に『女神：女性の神話的イメージ』を出版している。ダウニングはこれを「ある個性化の履歴書」と呼ぶ。³⁰⁾ ダウニングは自分の内面の感情的歴史を、セルフと女神神話の継承に結びつけることで理解する。ダウニングは、実に様々にペルセポネー、アリアドネ、ヘラ、アテネ、ガイア、アルテミスそしてアフロディテを関係づける。これらの神話の女神を物語と

捉えることで、ユング派のより固定的に見える女性のイメージより異教徒の物語の多元的、能動的な形式の女性的イメージの可能性を示す。

ダウンニングは、これらの女神が元型的に男性にも働くことをとみとめる。しかし、女性的な聖的形式は、主に女性のところに繋がっているという本質主義者の立場に近い。ダウンニングの業績は、女神神話の可能性について説得力を持続ける。すなわち、女神神話は、常により複雑で力動的用語という意味で、女性の心理学的存在をイメージする手段となる。「私たちは女性性の聖性を認めるイメージを切望している。そして、その複雑性、豊かさと女性のエネルギーを育てる力のイメージを強く望んでいる」³¹⁾

マリオン・ウッドマン ウッドマンの『孕める処女』(1985)は、女性のところを癒すモデルを構築する。それは、ユングのユダヤキリスト教を主とする枠組みから出発したパイオニア、エスター・ハーディングの伝統の中に戻るものである。初期の女性研究者同様、ウッドマンは、月の女神の物語をその源として取り上げる。³²⁾ 本当にユング派の「個人的神話」のやり方で、自我について合理的言語を用いて心理学的理論を著述する難しさを表す。ウッドマンは、ユングよりさらに進んで、女性の理論家は更なる問題を持つと指摘する。それは、合理的言語が伝統的に男性性に同化してきたという事である。「孕める処女」は蔑まれてきた女性的なもので、文化の外に排除され、女性に自分自身のところを抑圧するように仕向けるのだ。

私の理解では、「女性的」という言葉は、ジェンダーに関するものではなく、女性がかつて有しているというものでない。男性も女性もともに自分たちの孕める処女を求めている。孕める処女は、私たちの排除された一部である。その部分は、暗黒の中に下り、鉛色の暗黒を深く掘り下げることで、意識に上る。孕める処女の真の銀を掘り当てるまでつづく。³³⁾

最も重要なことは、この元型的な女性性がジェンダーからも身体的性からも離別し、多くの女神フェミニズムの本質主義的傾向から移行することである。ウッドマンは、物語風の装置として、内省、夢そして臨床的創造的ワークを用いる。それで、自分の著書の文脈の中で、孕める処女のところを探し当てるのである。特に、ユングアンフェミニズムの分析的実践の中で、女神を呼び覚ます例として、ドラマグループをグレートマザーの子宮に見立てて著述している。

リンダ・シャイルス・レオナルド 後期の刺激的な著作『狂った女との出会い』(1993)の中で、リンダ・シャイルス・レオナルドは、常軌を逸し、狂った女性を卑小化するステレオタイプを取り上げ、心的なエンパワーメントのイメージとして用いる。³⁴⁾ これは、父権性の中の女性の怒り(rage)を理解する方法となる。他のユングアンフェミニストと同様に、レオナルドは女性と心理的女性なものを危うげなく結びつける。しかし、「狂った女」を元型的エネルギーとして、男性にも同様に有効であると認める。『傷つけられた女性』(1982)は、イピゲネイア^{訳注7)}を父親と父権制文化に従属させられていた元型的イメージとして取り上げる。³⁵⁾

ナンシー・クォールズ-コルベット ナンシー・クォールズ-コルベットは『聖娼－永遠なる女性の姿』(1988)の中で、処女マリア、マグダラのマリア、黒色のマリアそして月の偉大な女神の元型的イメージを聖娼の慣習の中に見出す。³⁶⁾ このキリスト教以前の儀式では、女性は自分が奉仕をする女神を神殿内で選んだ。やってきたどのような男性も、この聖娼との性交を通して、聖なる女神と性的に一体になった。

クォールズ-コルベットは、この慣習をユング派原理の社会体制とみる。この原理は、性愛がヌーメンの無意識との霊的交流の手段となりうるということである。分析の一つの責務は、キリスト教以降の文化に未だに深く浸み込んだ、性愛と霊性の間のトラウマティックな分裂を癒すことである。聖娼は、一つの神話、一つの元型が吹き込まれた物語である。それは、男性と女性が、もっと多様な形の性的慣習とこの女神の話に包まれた社会的に成文化された制度をイメージすることを可能にさせる。

ジーン・ボーレン・シノダ 人気のある伝統的ユングアン女神フェミニズムはジーン・ボーレン・シノダの『女はみんな女神』(1984)にみられる。³⁷⁾ それは、種々の女神の元型的イメージと可能性の取集である。女神たちは、幾つかの範疇に分けられる：「処女」で独立した女神は、アルテミス、アテナ、ヘスティアである。女性の傷つきやすさと関係性という形により属する女神は、ペルセポネー、デメテルとヘラである。一方、アフロディテだけは錬金術的で変容的である。

元型的機能を説明する方法としてのこれらの「女神」は、トニー・ウルフの四つのタイプと縁がある。しかし、ボーレンは、多くの女性がそれぞれの元型的イメージに近づけると考える。女性は、状況によって幅広い元型的機能とエネルギーを引き出すことができる。これらの女神は、現代文化の中で女性の内面的生を十分にひきだす物語なのだ。

拡充法：偉大な女神の神話

前述したように、ユングアン女神フェミニズムは、革新的な治療実践と西洋文明に対する深遠な批評、両方にとっての物語風資源の組み合わせである。ユング派の研究者は、偉大な女神神話を展開する。そこでは、ユング派のグランドセオリーが、文化、歴史そして変容のジェンダーと女性性に関するフェミニズム理論（もしくは神話）へと拡充されたものになる。

E.C.ウィットモントはノイマンの人類の意識の三つの段階を発展させ、ぜひとも四つの段階が必要だと力説する。それは、人類の意識にとって、人間性に内在する聖性としての女性性を統合することが求められていることに他ならない。聖性は、もはや母性生もしくは自然世界を超越する父親-神によって制限されない。「女神への回帰」というタイトルのウィットモントの1982年の著書によって、人間性は神聖な本質を再発見する：人間の範疇にはヌーメンのな多産が含まれるのである。

それによって、西洋文明は、父権制による女性性の抑圧が唯一の明らかな例であるような、他者の抑圧に依拠する意識モデルを放棄する。

主要な研究者

E.C.ウィットモント ウィットモントによれば、悲惨なことに、ノイマンの意識の父権的段階が過大評価され、長く続きすぎた。「無意識のこころの深みでは、古代の女神が、蘇りつつある。認められ、敬われることを求める。もしもそれを認めることを拒めば、女神は破壊の力を発揮するかもしれない。もしも、その権利を認めれば、女神は我々を恵み深く変容へと導くかもしれない。」³⁸⁾ ウィットモントは、男性的一神教から派生する四つの神話が、分裂と抑圧に則った父権的思考の不毛さを強化することに寄与してきたと述べる。これらの神話とは、まず最初は未だに「魔法の」指導者にみられる聖なる王権、二つ目は人間の追放また天国の喪失、三番目は、身代わりのヤギの犠牲、そして四つ目が女性性の劣等である。今日の社会は、女神の復帰を必要とする。とういうのも父権的、無神論的、地球搾取的态度は、ウィットモントにとって、男性的一神教と直接結びついている。

ユングと違い、ウィットモントは確信している。すなわちキリスト教（と他の壮大な一神教）は、それらが抑圧している「他者」を解放するために改変されることは不可能であると。この他者が暗く、深く、身体とか女性性であるにせよなんにせよ、男性的一神教は人間のこころを分裂させることをやめないだろう。一神教は神経症的で、自然を超越し勝ち誇ることに専念する、一方的な構造である。

偉大な女神は、一神教的父権的意識が深く抑圧し続けてきた他者の兆候として蘇っている。女神は個々人のこころと文化的運動、たとえば新たな霊性の形、環境保護の訴えそしてエコ・フェミニズム^{訳注8)}をとおして復帰しつつある。

アン・ベアリングとジュリス・カッシュフォード ベアリングとカッシュフォードの1991年の著作『女神の神話：イメージの展開』はユング派の女神フェミニズムの最も包括的な解説を提供している。それは人類の文化と技術の広がりを見るためのレンズとなる。³⁹⁾ それを通して、新石器時代から脱工業化時代の疎外までを分析する。これは、ユングが意図したものよりもっと熱心に実証化されたグランド・セオリーである。その世界史の神話は明らかに意識の変革のためのフェミニズムの議論である。「女神文化の道德律は、関係性の原理の上に基礎を置いていた...神の文化の道德律は、対立と征服のパラダイムの上に基礎をおいていた：生命観、そしてとりわけ自然に対して、何かしらの『他者』として征服されるべきと考える。」⁴⁰⁾

重要なことに、この偉大な女神神話が、本質主義者が「女性宗教」と呼ぶものが男性的一神教にとって代わるとはみられないことである。もともと非ジェンダーであるグレートマザーは、創造者と創造されたもの、永遠と時間との関係を表す物語を提供する。「ゾエ (Zoe)^{訳注9)}」

もしくは生命の源にせよ聖なる母は「ビオス (bios)^{訳注10)}」としての女神の息子－恋人を誕生させる。また、生き物の内の生物圏と時間にとっての対象を生み出す。この「ビオス」は自然として創造されたものであり、自然の中の人間性である。それは限りある時間の中で生き、そして死に再び聖なる母の源へ返ってゆく。ここでの「女神 (She)」は、女性でも男性でもないが、全てのジェンダー化する可能性の聖なる源である。

男性的一神教は偉大な女神の物語を歪める。自然から聖なるものを分裂させることにより、人間意識の中に分裂を作り出す。この不幸な結果が、ジェンダーの二元論両極性であり、他者の抑圧の上に成り立つ意識である。

偉大な女神神話は、今なおユング派の研究に含まれるこころの全体性というもう一つのファンタジーを提供する。この意味では、ユングの自己元型への憧れを拡充したものであるが、キリスト教文化よりむしろ異教の前史時代と混ぜ合わされている。しかし、このユンギアンフェミニズムの支流の目的は、個人だけでなく、宇宙全体の癒しである。聖性は意識の中の一段階ではない：それは意識の中の構造なのである。ここでの主体性のモデルは、人とつながる生命の入り組んだ組織である。自然とつながり、聖性とつながり、意識の無意識へのつながり、女性と心の中の男性に繋がる。聖性は自然の一部であり、人間はこの躍動の一部である。「母なる女神は、それが見出されるところでは、一つのイメージである。それは、一つの有機的、生きたそして聖なる全体性としての宇宙への認識を刺激し、焦点づける。その中では、人間性、大地、地上の全ての生き物は、『女神の子どもたち』として共にある。」⁴¹⁾

女神と女性原理：簡単なまとめ

ユンギアンフェミニズム（グランドセオリー）の功績

文書によく残されている女性蔑視にもかかわらず、ユングはジェンダーと女性性に関する価値ある論考を残した。これをユングのフェミニストの後継者は取り上げてきた。この考えには、象徴と神話の中の「女性性」の探求も含まれる。これは、女性性と男性性がそれぞれのジェンダーに存在することをはっきりさせ、女性性の抑圧がこころと文化にもたらす害悪に抵抗する。また、分析の実践の中で女性の十全な自己実現という主張も含まれる。これらすべてによって、ユングの還元的で女性蔑視的言説の烙印が取りさられるわけではない。また、ジェンダーを生物学的性差に落とし込むこと、女性を女性性、エロスそして拡散した意識と同一視することを払拭するわけでもない。特に問題なのは、ユングが女性心理学を男性心理学にとって反対のものであり、補償的だと述べる点である。

伝統的ユンギアンフェミニズムは、グランドセオリーであるユングの著作をとりあげながら、フェミニストがユング心理学の中で批判する多くの問題を取り扱ってきた。女性を男性のこころにとっての「他者の側」という考えからジェンダーの二元的構造に依拠しないで、それらの複雑さを探求するという動きもあった。ユングのこころの相反する性愛という主張は発展させられて

きた：アニムスとアニマといった用語がユングの著作の文化的制約に気づくという事で、改訂されてきた。

有効なことに、女性の心理的困難の中にある父権的構造を反映したジェンダーの表現とジェンダー役割に関する文化的要因の強調が増してきていることである。より広範な文化の中で、「女性」と「女性性」という用語が、今では分離可能であるが、曖昧な関係のままのところもある。一般的に、グランドセオリーに立つユンギアンフェミニズムを見分けるのは、ジェンダーを少しでも固定的なカテゴリーとしてみる態度があるかどうかである。ユンギアンフェミニズムでは、物質的文化の影響を考える以前にユングの著述か、ユング好みの文化的神話学の素材、もしくはその両方にジェンダーの恒常性の根拠が求められる。

女神フェミニズム：その評価

ユンギアン女神フェミニズムは、こころ、人類の文化そして歴史の理解に変革をもたらすというフェミニズムの試みである。多くの西洋文化にとって、また事実多くの西洋のフェミニズムにとって、女神フェミニズムは、実体化された物質的政治の集中には対抗できないものとして映っている。何故、近代フェミニズムが、既存の宗教、工業が機能しなくなった時代に、古代の女神の物語を再編、再吸収しなければならないのか？女神フェミニズムが文字通りの宗教（ユンギアンフェミニズムの中ではそうではないが）ではないとしても、それがどうだというのだろうか？

ユンギアン女神フェミニズムは理論的にも実際の実践という意味でも、多くの実用的なやり方で擁護される。まず最初に、理論的には、ユングのそれに関する理論を上げることができる。それは、あらゆる種類の伝統的宗教の神話学と文化には元型的素材が含まれていることだ。したがって、どのような女神神話に対する新たな注視でも、聖性における幾世紀にもわたる一方的な男性性への傾倒を改訂するかもしれない。このような不平等な一方のジェンダーへの焦点づけが、女性と男性双方の心理学的可能性を歪めてきたのだ（もちろん女性の傷つきが大きいのはいうまでもない）。

フェミニズムの観点にたつ分析の実践にとって、女神フェミニズムは女性的虚構にエンパワメントと現実の力を与える可能性をもたらす。というのもユンギアンフェミニズムはこころとイメージの重要な素材なので、字義どおりの宗教の置き換えではないからだ。多くの心理療法家とフェミニストにとって、フェミニズム理論の支流としての女神フェミニズムは、傷ついた女性を癒す方法として、実証的、実際的な方法より、実行可能性が少ない。

筆者としては、ユンギアン女神フェミニズムを二つの意味でファンタジー文学の心理学と呼びたい。まず、ユンギアン女神フェミニズムは、輝きを放つファンタジーを分析の中で構築することを可能にする。二番目に、文学的意味で、テキストを女神フェミニズムで解釈することを、伝統的フェミニズムの空想科学物語やファンタジー小説に結びつけられるかもしれない。例えば、フェミニズムのファンタジー小説はその調子と意図からみて、E.C.ウィットモントの著作に

非常に近い。

女神フェミニズムをフェミニズムファンタジー小説とみなすと、議論の多い文学と心理学の境界に据えることになる。ここに、ユングアン女神フェミニズムは、心理学の主流と世俗の近代性自体の両方に背く、ゴシック文学とみなされる。ユングアン女神フェミニズムは理論的フェミニズムよりむしろ実用的な何かを提供する。主体性についての種々の仮説を提供する理論的フェミニズムはジェンダーとパーソナリティーに関して「パフォーマティブ (performative)」^{訳注11)}なものとする見解に繋がる。ジェンダーは、中核的で不動の実存というより、むしろプロセスであり、社会的、心理的「ドラマ」の形式とみなされる。脱近代的な文学と心理学のフェミニストによるさらに詳細な連結については、第6章を参照のこと。

もう一つ指摘しておきたいことは、女神フェミニズムの持つ、ジェンダーと外部の文化に関する批判的議論を再考する方法としての可能性の価値である。もしくは少なくとも脱キリスト教的一神教文化という伝統が減少した中での議論についてである。より深いレベルでは、女神フェミニズムは、ジェンダーに関して長らく支配的であった文化的議論の二者択一の理論から我々を解放放つ。偉大な女神が一神教の女性版でなくても、もうひとつのものを「他者」として排除することで二元論を形成することになる。偉大な女神は自然に内在するものである。それは必ず多元的に分化したものとして体験される。物質世界を超越するものではなく、一つでもなく、一つの物に「他者」を足したものではない。この意味で、「女神たちの意識」は多様で分化されている；この見解は脱近代の分断された意識に実りある対話を与えることができる。(6章参照)

ユングアン女神フェミニズムは、周縁的、歴史的神話（もしくは周縁的歴史のフェミニストによる改訂）の上に表示されている、グランドセオリーとしてユングの考えの最も野心的な拡充である。まさにジェンダーに関するポストユングアンの業績を、「個人的神話」であるユングの理論の特徴をとおしてみる時代なのである。

結論のまとめ

伝統的ユングアンフェミニズムはグランドセオリーであるユングの業績に起源を求めている。それを拡大し、改訂しそしてユングのジェンダーと女性性に関する見解を拡充する。それは、理論と実践を相互に支持し、また互いに批判するという組み合わせである。ユングアンフェミニズムの神髄は、理論を分析的実践に結び付けることである。しかし、それはしばしば女性だけに限らない。

神話学が個人の心的体験をユングの業績とより広範な文化に繋ぐ特徴ある方法となる。「女性的」「男性的」原理の説明が、両極的な二元論として使われ、文化の中で作用し、女性、男性双方のところに適用しうるものである。したがって、ジェンダーは生物学的性を離れ、どの個人の内でも多元的に認識される。

ユングアン女神フェミニズムでは、女神たちの神話的語りが尊重される。これらは、長きに

わたって従属を強いられてきた女性のこころを表現し、エンパワーメントする唯一の満足な手段である。女神フェミニズムは、拡大することが可能であり、人間の文化、心、科学技術を包括する神話を偉大な女神神話の中に形づくることができる。今まで、きちんと評価されてこなかったものは、脱近代、ポスト構造主義、そしてより広範なフェミニズムの理論的背景である。このような論争の場に臨む前に、ジェンダーに関するポストユングの業績に触れる必要がある。それは伝統的ユングフェミニズムの確実性に（正しく）非常に慎重であることなのだ。

更なる学習のための文献^{訳注12)}

総 論

Douglas, Claire, *The Woman in the Mirror: Analytical Psychology and the Feminine* (Boston: Sigo Press, 1990).

ジェンダー、ユングの著作の中の女性性、ポストユングのその分野の著作に関して計り知れない価値のある歴史的解説である。

ユングの見解の拡大と改訂について

Claremont de Castillejo, Irene, *Knowing Woman: A Feminine Psychology* (Boston: Shambhala, 1973).

ユングの女性蔑視的な意図と絶縁し、元型的ジェンダーの改訂を提言する。

Jung, Emma, *Animus and Anima* (Woodstock, Conn.: Spring Publications, 1957). [エンマ・ユング著, 笠原嘉, 吉本千鶴子(訳)(2013)『内なる異性－アニムスとアニマ (バウンダリー叢書)』海鳴社]

この初期のユングの見解を拡大する著作の中で、エンマ・ユングはユングの否定的アニムス論に関して、肯定的で鋭い評論を行っている。

Ulanov, Ann, *The Feminine in Jungian Psychology and in Christian Theology* (Evanston, Ill.: Northwestern University Press, 1971).

ユングの反対の性というジェンダーとユングのキリスト教神学の再考の見解双方を拡大する上で非常に大きな影響を持つ著作である。

Young-Eisendrath, Polly, with Wiedemann, Florence, *Female Authority: Empowering Women through Psychotherapy* (New York: Guilford Press, 1987).

ユングのジェンダーに関する見解の限界を強く批判し、ユングの概念を個性化を通して女性をエンパワーメントするものに改訂している。

女性原理について

Esther, M. Harding, *Woman's Mysteries: Ancient and Modern* (1935; New York: Harper & Row Colophon, 1976). [M. エスター・ハーディング、樋口和彦、武田憲子訳(1985)『女性の神秘－月の神話と女性原理 (ユング心理学選書(8))』創元社]

力強いイメージで多くのユングフェミニズムの元祖である。ハーディングはユングの神話学を巡る理論を拡充している。

Leonard, Linda Schierse, *Meeting the Madwoman: An Inner Challenge for Feminine Spirit* (New York: Bantam Books, 1993).

否定的な女性のステレオタイプを思慮深く最イメージすることで心理的変容の方法としている。

Woodman, Marion, *The Pregnant Virgin: A Process of Psychological Transformation* (Toronto: Inner City Books, 1985).

女性性を喚起する探求である。ウッドマンは、神話を身体的ワークとドラマの分析に結びつける。

Brinton Perera, Sylvia, *Decent to the Goddess: A Way of Initiation for Women* (Toronto: Inner City Books, 1981). [シルヴィア・B・ペレラ著, 杉岡津岐子, 小坂和子, 谷口節子訳『神話に見る女性のイニシエーション (ユング心理学選書; 20)』(1998)創元社]

ユングアン女神フェミニズム

Baring, Anne, and Cashford, Jules, *The Myth of the Goddess: Evolution of an Image* (Harmondsworth: Viking, 1991).

新石器時代から現在までの歴史と文化をユングアン女神フェミニズムの意味で徹底した包括的な最解釈である。

Brinton Perera, Sylvia, *Decent to the Goddess: A Way of Initiation for Women* (Toronto: Inner City Books, 1981). [シルヴィア・B・ペレラ著, 杉岡津岐子, 小坂和子, 谷口節子訳『神話に見る女性のイニシエーション (ユング心理学選書; 20)』(1998)創元社]

シュメール神話のイナンナを通して女性性の「暗黒面」の良く知られた影響力のある分析である。

Paris, Ginette, *The Sacrament of Abortion, tr. from the French by Joanna Mott* (Dallas, Tx.: Spring Publications, 1992).

近代の脱キリスト教文化より、むしろ古代の女神達の見地から堕胎に対する現代の態度についての魅力的な研究である。

Whitmont, E.C., *Return of the Goddess* (New York: Continuum Publishing, 1982).

この分野における枠組みに欠くことのできない詳説である。

原注第3章 女神と女性原理

- 1) M. Esther Harding, *Woman's Mysteries: Ancient and Modern* (1935: New York: Harper & Row Colophon, 1976). [M. エスター・ハーディング、樋口和彦、武田憲子訳(1985)『女性の神秘－月の神話と女性原理 (ユング心理学選書(8)) 創元社]
- 2) Emma Jung, *Animus and Anima* (Woodstock, Conn.: Spring Publications, 1957). [エンマ・ユング著, 笠原嘉, 吉本千鶴子(訳) (2013)『内なる異性－アニムスとアニマ (パウンダリー叢書) 海鳴社]
- 3) 同上, p.23.
- 4) 同上, p.4.
- 5) Linda Fierz-David, *Women's Dionysian Initiation: The Villa of Mysteries in Pompeii*, tr. Gladys Phelan and with an introduction by M. Ester Harding (Jungian Classic Series II: Dallas, Tex.: Spring Publications Inc., 1988), p.64.
- 6) Irene Claremont de Castillejo, *Knowing Woman: A Feminine Psychology* (Boston: Shambhala, 1973)
- 7) Hilde Binswanger, 'Positive Aspects of the Animus', *Spring: A Journal of Archetype and Culture* (1963), pp.82-101.
- 8) 同上, p.87.
- 9) Ann Ulanov, *The Feminine in Jungian Psychology and in Christian Theology* (Evanston, Ill.: Northwestern University Press, 1971).
- 10) Ann and Barry Ulanov, *Transforming Sexuality: The Archetypal World of Anima and Animus* (Boston: Shambhala, 1994).
- 11) 同上.
- 12) Marion Woodman, *Addiction to Perfection: The Still Unravished Bride* (Toronto: Inner City Books, 1982).
- 13) Marion Woodman, *The Owl was Baker's Daughter: Obesity, Anorexia Nervosa and the Repressed Feminine* (Toronto: Inner City Books, 1980) [マリオン・ウッドマン著, 桑原知子, 山口素子(訳) (1987)『女性性の再発見－肥満とやせ症を通して』(ユング心理学選書) 創元社]

- 14) Polly Young-Eisendrath, with Florence Wiedemann, *Female Authority: Empowering Women through Psychotherapy* (New York: Guilford Press, 1987).
- 15) Polly Young-Eisendrath, *Hags and Heroes: A Feminist Approach to Jungian Psychotherapy with Couples* (Toronto: Inner City Books, 1984) [ポリ・ヤング-エイゼンドラス著, 村本詔司, 織田元子(訳)『夫婦カウンセリング-女が真に求めるものは何か (ユング心理学選書)』(1987)創元社]
- 16) Claire Douglas, *The Woman in the Mirror: Analytical Psychology and the Feminine* (Boston: Sigo Press, 1990)
- 17) E. C. Whitmont, *Return of the Goddess* (New York: Continuum Publishing, 1982), 128.
- 18) Harding, *Woman's Mysteries*, p.105.
- 19) Toni Wolf, 'A Few Thoughts on the Process of Individuation in Women' (1934), *Spring* (1941), 81-103.
- 20) Erich Neumann, *The Origins and History of Consciousness* (Princeton: Princeton University Press, 1954) [エーリッヒ・ノイマン著, 林道義訳『意識の起源史(上)』(1984)紀伊国屋書店, エーリッヒ・ノイマン著, 林道義(訳)『意識の起源史(下)』(1985)紀伊国屋書店]
- 21) June Singer, *Boundaries of the Soul* (New York: A. Knopf, 1972).
- 22) June Singer, *Androgyny: Toward a New Theory of Sexuality* (Boston: Sigo Press, 1976). [ジューン・シンガー著, 藤瀬恭子訳『男女両性具有一性意識の新しい理論を求めて I』(1981)人文書院. ジューン・シンガー著, 藤瀬恭子訳『男女両性具有一性意識の新しい理論を求めて II』(1982)人文書院]
- 23) 同上, p.8.
- 24) 同上, p.10.
- 25) Claremont de Castillejo, *Knowing Woman*, p.42.
- 26) Ann Ulanov, *The Feminine*, p.13.
- 27) Ginette Paris, *The Sacrament of Abortion*, tr. from the French by Joanna Mott (Dallas, Tx.: Spring Publications, 1992).
- 28) 同上, p.27.
- 29) Sylvia Brinton Perera, *Decent to the Goddess: A Way of Initiation for Women* (Toronto: Inner City Books, 1981). [シルヴィア・B・ペレラ著, 杉岡津岐子, 小坂和子, 谷口節子訳『神話に見る女性のイニシエーション (ユング心理学選書: 20)』(1998)創元社]
- 30) Christine Downing, *The Goddess: Mythological Image of the Feminine* (New York: Crossroad Publishing Co., 1984).
- 31) 同上, p.4.
- 32) Marion Woodman, *The Pregnant Virgin: A Process of Psychological Transformation* (Toronto: Inner City Books, 1985).
- 33) 同上, p.10.
- 34) Linda Schierse Leonard, *Meeting the Madwoman: An Inner Challenge for Feminine Spirit* (New York: Bantam Books, 1993).
- 35) Linda Schierse Leonard, *The Wounded Woman: Healing the Father-Daughter Relationship* (Athens, Oh.: Swallow Press, 1982).
- 36) Nancy Qualls-Corbett, *The Sacred Prostitute: Eternal Aspect of the Feminine* (Toronto: Inner City Books, 1988). [N. クォールズ-コルベット著, 菅野信夫, 高石恭子訳『聖娼-永遠なる女性の姿』(1998)日本評論社]
- 37) Jean Shinoda Bolen, *Goddess in Everywoman: A New Psychology of Women* (New York: Harper & Row, 1984). [ジーン・シノダ・ボーレン著, 村本詔司・村本邦子訳『女はみんな女神』(1991)新水社(絶版), (2007)女性ライフサイクル研究所(電子版) <http://www.flcflc.com/book/books/image/goddesses.pdf>]

38) Whitmont, *Return of the Goddess*, p. viii.

39) Anne Baring and Jules Cashford, *The Myth of the Goddess: Evolution of an Image* (Harmondsworth: Viking, 1991).

40) 同上, p. 158.

41) 同上, p. xi.

訳 注

- 1) 本章はSusan Rowland (2002) *Jung A Feminist Revision*, Oxford: Polity Pressの3章、3章の注の翻訳である。翻訳に当たっては著作権を有するPolity Press社より許諾を得た。
- 2) 本部分の翻訳は以下の翻訳書に従った。N. クォールズ・コルベット著、菅野信夫、高石恭子(訳)聖娼永遠なる女性の姿、日本評論社
- 3) 本部分の翻訳は以下の翻訳書に従った。エンマ・ユング著、笠原嘉、吉本千鶴子(訳)(2013)『内なる異性－アニムスとアニマ (バウンダリー叢書)』海鳴社。
- 4) オルベウス教 もしくはオルフェウス教。古代ギリシアにおける密儀教。
- 5) サテュロス ギリシア神話に登場する半神半獣の自然の精霊。
- 6) 本部分の翻訳は以下の翻訳書に従った。ジューン・シンガー著、藤瀬恭子訳『男女両性具有－性意識の新しい理論を求めて I』(1981)人文書院。
- 7) イピゲネイア ギリシア神話の登場人物、アガメムノンの娘。トロイ戦争に向かう船の風を確保するために女神アルテミスへのいけにえに供されたが、アルテミスに助けられその女神官となった。
- 8) エコ・フェミニズム エコフェミニズムという語は1974年、フランス人フェミニストのF・デュボンヌ (Françoise d'Eaubonne) の著書『フェミニズムか死か (Le Féminisme ou la mort)』で初めて使用され、誕生した。エコロジー運動とフェミニズム運動の概念を併せ持った社会的・経済的な思想や活動の総称。エコロジカルフェミニズムとも呼ばれる。
- 9) ゴエ (Zoe) ギリシア語由来で生命、命、人生を意味する。
- 10) ビオス (bios) ギリシア語由来で命、生活、暮らしを意味する。上記のZoeとの違いは、哲学、神学、倫理学それぞれに個別の定義があり、その区別は文脈による。
- 11) パーフォーマティブ (performative) 直訳すれば哲学・言語学の用語で遂行文。すなわちI apologize. (私は謝罪する) と言葉でのべることが、謝罪の行為を示すような言説。
- 12) 参考文献、原注で取り上げられた文献で和訳されているものを [] に示した。